

孟子の王に説くや亦王道によりて國家萬民を萬世の安に置かむとす、詩に之れ有り「高山仰止景行止」と今孟子の人と爲りを想見するに亦斯の如く、布衣を以て王侯に説くに道を以てし、これを寫すに不滅の大文章を以てす、宜なるかな學者千古に傳へて是を宗とし、天子王侯より宇内王道を云ふ者、皆孟子に折衷す、亦聖と謂ふべし。

筆路滔々議論正大不似少女之口氣蓋自賈生過秦論脫化來者可謂傑作。 劍堂評

日記の中より

四年 撫子

□ランニング (五月二十八日)

強い興奮と張り裂け相な緊張の中にランニングをしてゐる人を見つめてゐると、私は胸が一杯になつて口がきけなくなる強いて後援をし様とすれば聲よりさきに涙があふれ出る。熱い涙、それは決して悲しい意味のものでなく又苦しさを訴へるたちのもの

○巢鴨病院 (五月三十日)

去る傳手を得て私は巢鴨の病院に行つて観ることが出来た。二三日降り続いた五月雨にめつきり美しさをみせてゐる新緑は此所にも初夏を暗示してゐる。廊下をもつてつながれた煉瓦造りの棟毎にはそれ／＼庭があつて軟かいなつかしい草花が折柄の雨に露をおびてきもちよく咲いてゐる。氣狂ひの中にも花を愛づる程の正氣をもつてゐる人があるのか知らんと思ひながら導かれて行つてみて驚いた。薄暗い汚い室に澤山な患者がある。心の亡び去つた人間の殘骸のみぐるしさ淺しさを憐うまでとは思はなかつた何といふいたましい敗殘の群でせう。一々の印象については逆もかく事が出来ぬ。まるで知らなかつた慘酷さをわざ／＼味ひに來た自分の無知をどんなに悔いたことせう。ロシア人でなくともこんないたましさをみる程なら捨て去られたあはれなこれ等の人々の形骸を私は如何にかしてやりたかつた。こんなになつて後までも亡びて行かぬ生きる力がたまたまなくおそろしかつた。のろはしかつた、しかしながら如何することも出來ずに病院を出て停留所に

のでもない。あの全力集注して倒れてしまふ瞬間まで、否倒れてもすぐ起きあがつて目的に向つて突進する清い美しい立派な努力に打たれて心の底からゆり動かされた純な感激の表現です。

私は何か非常な刺激に目覺されたとき「よし、死ぬまでやる」と自分で自分の心にしつかりと誓ひます。けれども時が徐ろに其緊張の山を崩して行き興奮をうばひ去つてしまふ。何の洗練をも經ない原始的な生き様とする力が強く私を支配して、若しい努力を避けしめ静かな春の海を大艦で航海するときの様な平和さと單調さの中におひやつてしまふ。だから「死ぬまでもやる」といつたときこの緊張の最後であり努力の絶頂になつてしまつてゐる。

「倒れて後止む」といふ語を實現する努力の絶頂の瞬間は、普通の状態には來ないもの、様に思はれる其つきつめた瞬間が今あのつまづいて倒れた人の上にもみられる。眞剣に一生懸命といふ尊い偉大な人をランニングの中にみいだした私は、只の一度でもいゝから、ランニングをやつてみたいとしみ／＼思つた。

電車をまつ間。私の目に映じた通行人がみんな氣狂ひにみえた。そして特に私の近くを通る人等は今にもあの不安らしい目と變な聲と調子とで何かいひ出し相でこはくてたまらなかつた。電車にのつてからも私の目は不安にかゞやきつゞけてゐたに相違ない周囲の人が妙に自分ばかりをみつめてゐる様に思はれる。やがて高等學校前で電車を下りた恰度其時向ふから大聲な歌をきいた。「あ、あすこにも氣狂ひがある」と思はず獨言つてしまつた。

ある夜

うら子

雑木林に残りし夕陽のかけ薄れて、蒼茫と暮れ行く六月の夕こそ静けきものなれ。

青ざめし空にあて人の瞳にも似たる星は、早う三つ四つ輝きそめたり。深く悲しき明滅の！あはれ幽玄の世界につゞく、永遠の輝、獨り欄干によれば、いつのまに、何處より現れにけむ、影の如く静かなる人、吾が後に立てり。やゝありて、影の人は言へり。

淋しく弱く生きて侍り。うなだれて行く吾が影を哀ども見給へかし。あまり多くを人に求めぬ。されども人は遂に人なりき。眞の吾は吾のみ知るものを、如何に親しければとて、人は遂に人を知らじ、悲しみにえ堪へぬ時、人は言へり。樂しくも君の見え給ふかな」吾は、淋しく笑みてありぬ。

「孤獨なるものよ汝は吾が住居なり」雨蕭々の山中を駆け廻りつゝ、叫びし人のなつかしきかな。孤獨は人の永遠の悲しみかや。

影の人は再び言へり。「強く生きよ！淋しく強く！凡ての事強ければ可なり」と影の人は影の如く去りて跡もなし。

美しき、多くの夢を見るがごと、月はおぼろに、風強うして、遠方に、蛙の聲しきりなり。

路傍より

三年 うき代

六月のある日、五月雨が二日ばかり快い碧空を見せて、涼しい風が新樹の梢を鳴らしてゐる氣持のよ

い朝であつた。

いつも初夏の頃に感ずる、ある漠然とした明るい希望、生命の流れに感じられる力、そんなもの、一面に、或る一つのものを焦點にして悲哀が、野の草の様に廣くはびこつた、その中に私は居た。五本の指を髪の中に突込んで、熱と頭を押えて眼を瞑るとはてしなく涙が流れる。私は悲しい出来事を郷里の家を持つてゐて、それは絶えず私を、現實にもつと強く、確りしなくてはならないと、勵まし促がしあふる力の要求をすらしめてゐた、其は悲しみの中で悲しみであつたけれど、その考から成る可く避けるやうに。私は暗い沈んだ胸から頭を離してうち仰いで光をうけることに努めてゐた。寂しさを振り落す様に眼を擧げて熱と灰色の壁を見詰めてゐると、また心が視覚と次第に離れて行つて瞳の先には鈍い光線が映るのみだ。過去を葬り現在をも否定し勝ちに未來へ未來へと憧憬がれて流れて行く生活、可なりの努力と焦燥とに苦しみ乍ら實生活の上には棒片の様に愚かな鉛の様に鈍い自分、低い知識愚かな能力浅い思念この修養の浅い動搖と疑念の多い心で、雪

の如く清く尊い人の子を教育すると云ふ重い大きな將來の任を持つ借越さ、凡ては咎めらるゝものばかりであつた。統一を求め結着點を期待して努力する私は、結果は原因になる許りでいたちごつこの様に輪の周りを驅けるのであつた。もう絶望だと疲れ切つた時に思つた。併しまた遂々こんな事を考へ出した。この絶望の状態になつた吾々の生活は應て再生すべき吾々を見出す時に遭遇したのではなからうか、生活の倦怠は一面から云へば更に其は直ちに大なる欲求の表現である。それは産婦の苦痛に同じく其の瞬間とを過ぐれば喜びと安樂の來る事の可能性を信じ得るものではないだらうか。勿論この可能性の信があつても絶望の苦は減じないが大きな慰藉となるのである。この絶望悲哀の境地に明かなる自己を見出して在らんとする努力が寧ろ自分としつとり合つて心嬉しいものではないだらうか、運命說神秘説と云つても、私はおもふ。この不可抗な力、運命の翻弄と云ふことが決して其の人にどつては凡ての否定ではなくて、矢張り不可抗な力も、自己の中に渾一することが出來、其運命說に同感し得た時には其

は決して不可抗な力でなく其人の生活圏内に入つて其生活意志を意味づけられたものでは無からうか。吾々はこの生活の絶望をしつとり自分の内心に味つて見なければならぬ、決して輕卒な態度でなくて謙讓の心持を以て深く考慮して見なければならぬ。さもなくば生活の絶望は、只生活を危險に陥らしむる自己呪咀の凡てともなり終るであらう。その結果としての苦しい境地から超脱せん日を、禱るべきである。私は充分その可能性を信ずることが出来る。小さな過去の經驗の中に、充分これを豫想せしむべきものを持つてゐる様に思ふのである。私どもの生活が今后どんな形で迫つて來るか、豫想は出來ないけれど、如何なるものも吾々を、更に強く深くならしむべきものであることは、充分信じてよいではなからうか。この様な考へは、私を更に生活の次の一歩に奮ひ起たせた。

人を怖れ、自らを隅に消すにして居て、どうしてこの先の生活が出來やう、自由の時間を有し、孤獨の境地に置かれた時、果してそれだけの統一と、慰藉とを得たことだらう。自分の無能が人を恐れさせ